

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0488 ◆◆◆

18/06/20

【 サッカーW杯はじまる、経験則では「期間中小動き」か 】

サッカーの世界カップと言え、世界最大のスポーツイベントだ。「期間中の全世界テレビ視聴率はオリンピックを凌ぐ」一とも言われている。そんなワールドカップが先週14日、ホスト国であるロシア vs アジアの雄・サウジアラビアという一戦でいよいよ始まった。

期間中の為替変動について、変動相場制以降過去12回を筆者が検証したところ、やはりゲームの動向が気になる市場関係者が多いのか、大会の開催期間中は意外なほど小動きを辿っているケースが目につく結果となっている。再び動意の兆しが見えてきたドル/円相場だが、今後、予選リーグを終え、決勝トーナメントに向けた熱い展開をたどるなか、金融市場は逆に膠着感を強める可能性を否定できないのかも知れない。

◎ユーロ/ドルはドル/円以上に小動き!?

サッカーといえば、日本では依然として潜在的な人気において野球の後塵を拝している感を否めない。しかし、欧州や一部のアジア諸国においては国技になっている先も少なくないなど、国民的なスポーツとして人気は非常に高い。

そんなワールドカップがはじめて開催されたのは1930年のウルグアイ(1939-49年は戦争などで中断)だったが、筆者が1973年の変動相場制以降に開催された全12回のワールドカップ期間中の為替変動を調べたところ、その殆どのケースにおいて意外なほど小動きを辿っていることが明らかになった。典型事例は、前回2014年ブラジル大会(6月12日-7月13日)か。大会期間中のレンジは101.06-102.38円と、わずか1.32円の変動に過ぎない。また、2006年ドイツ大会(6月9日-7月9日)も、113.55-116.71円で3円強の値動きにとどまっていた。

一方で、同様にワールドカップとユーロ/ドル相場の関係を調べてみると、こちらは開催期間中にドル/円以上に膠着度合いを強めていることがうかがえる。実例として挙げるなら、やはり前回2014年大会が典型例で、期間中はおよそ1.35-37ドル、200ポイントのレンジ取引に終始していた。また、もうひとつ興味深いのは、一口に「ワールドカップ期間中」といっても、いわゆる予選リーグの期間より、決勝トーナメントの期間、つまり日程的には後半戦にかけての動意が鈍い傾向もうかがえる。今年でいえば、6月よりも7月以降の値動きが限られたものになる可能性も否定できない。

いずれにしても、先にも記したように、サッカー発祥の地である英国をはじめとする欧州諸国だけでなく、ブラジルなど中南米を中心とした新興国におけるサッカー熱は高く、そのため開催期間中の為替取引はどうしても手控えられる傾向が往々にして見られる。鼻頂にしている自分の出身国のチームが勝ち上がれば尚更だ。それこそ「試合中は取引どころではない」一という市場関係者がいても不思議はないだろう。

最近でこそ、為替取引の世界もAI(人工知能)が幅を利かせているとはいえ、大会中は世界最大のマーケットである「シティ(ロンドン)」を中心としたヤル気減退、開店休業が日米の為替マーケットへも波及する可能性をありそうだ。

もっとも逆に言えば、参加者の減少は市場流動性の低下に繋がるわけで、一歩間違えば相場が上下に大きく振れる危険性を秘めていることになる。「ワールドカップ期間中は動かない」と決め付けるのではなく、そこはフレキシブルに。不意の変動に備え、ストップロスをしっかりと置くなど、リスク管理をしっかりとしたうえで取引をしていただきたいと思う。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

